

# チーム医療 1

## 先進糖尿病チーム活動に新たに加わるデバイス管理

＝FreeStyle リブレ Link への期待＝

◎鵜塚 仁菜<sup>1)</sup>、宮本 大資<sup>1)</sup>、宮本 崇三<sup>1)</sup>、愛甲 佐津紀<sup>1)</sup>、佐藤 直美<sup>1)</sup>、西 律子<sup>1)</sup>、伊藤 慶人<sup>2)</sup>、丹波 祥子<sup>2)</sup>  
一般財団法人 住友病院 臨床検査技術科<sup>1)</sup>、同 内分泌代謝内科<sup>2)</sup>

【背景】当院の先進糖尿病チームの臨床検査技師は各種 CGM の解析、管理に加え、CGM 担当として患者からの問い合わせにも対応している。また iCGM である FreeStyle リブレ (以下リブレ) については、外来導入時の説明も担当するようになり、より CGM 使用患者との関わりが増える中、新たなツールとして、スマートフォン (以下スマホ) アプリ「FreeStyle リブレ Link (以下 Link)」がリリースされた。【目的】リブレ使用者の背景・満足度を把握し、自己管理に役立つより良いデバイスとして、新たに Link を紹介できるのか、使用感を含め正しい情報を知り、導入準備することを目的とした。【方法】①2020 年 4 月～2021 年 5 月の問い合わせ内容を調査し、2021 年 4 月～2021 年 5 月 17 日の間に外来受診したリブレ使用者 77 例の患者背景を検索、同意を得られた患者に対して、リブレの満足度などについてアンケートを実施した。②発表者らが Link を実際に体験し、リブレ (Reader) 測定値や SMBG 値との差、デバイスの使用感を確認した。【結果】①問い合わせ総数は 60 件、リブレに関するものが 47 件 (78.3%)、うち SMBG 値との差が大きい・異常な低血糖を示すなど、精度に対するものが 16 件あった。また調査したリブレ使用患者 (77 例) は、平均年齢 61±13 歳、男/女=47/30 例、1 型/2 型/その他の型=40/36/1 例であった。アンケートの中間結果では、リブレの満足な点として、「どこでも何度でも測定できる」、不満な点として「リブレと SMBG の測定値の乖離」が最も多かった。②Link で測定した平均グルコース値は SMBG 値よりも高く、依然 SMBG との乖離はみられた。また、スマホで気軽に測定できるという点や、クラウド環境を利用して家族や医師が遠隔で情報共有できる利点もある反面、センサーが読み取りにくいという声や、Link が使用できないスマホの機種もあった。【考察】既存リブレでは SMBG 値との乖離や異常低値に対する訴えが多かった。しかし Link で Reader より測定値が高めになり、異常低値は改善する可能性が期待され、スマホ保有のリブレ使用者にとって、Link は利便性が高まると考えられた。一方、センサー読み取り時の感度は Reader より劣り、操作の煩雑性も増加した。対象患者の年齢や特徴を考慮した上で、リブレ Reader/ Link どちらの導入を薦めるのかを選択する必要があると考えられた。【連絡先】06-6443-1261 (内線 6002)

## チーム医療2

### 神戸大学医学部附属病院バイオリソースセンターにおける臨床検査技師の取り組み

◎福岡 知也<sup>1)</sup>、佐藤 伊都子<sup>1)</sup>、倉島 佳歩<sup>1)</sup>、河野 瑠璃<sup>1)</sup>、宮田 吉晴<sup>2)</sup>、今西 孝充<sup>1)</sup>、矢野 嘉彦<sup>1)</sup>、松岡 広<sup>2)</sup>  
国立大学法人 神戸大学医学部附属病院<sup>1)</sup>、神戸大学大学院医学研究科 バイオリソース研究・開発推進学分野<sup>2)</sup>

【緒言】近年、新たな診断薬や創薬におけるバイオリソースの利活用が注目されている。神戸大学医学部附属病院バイオリソースセンターでは、研究・開発におけるニーズに即して「ヒト検体」の提供を検査部と連携して行っている。

【目的】当センターでの取り組みを紹介し、バイオバンクにおける臨床検査技師の新しい働き方を提案する。

【取り組み】①ニーズ・ドリブン型の検体収集：アカデミアや企業との共同研究において、倫理委員会で承認された研究計画書に基づき残余検体および新規採取検体の収集・管理を診療科と共同して行っている。ヒト検体を用いた研究では、目的に合致する検体を選定することが極めて重要である。研究の立案段階から臨床検査技師が参画することでニーズを的確に汲み取ると同時に検体の収集見込みを予測できるため、円滑に研究を行うためのコーディネートが可能である。また、品質を保持しながら、検査結果に基づいて検体を選定する業務は臨床検査技師の専門性が必須の領域である。②当日検体の提供：新鮮検体を用いる研究では当日に採取された検体が必要となる。このような検体提

供を実現化するためには検査部との密な連携が必要であり、迅速性の観点からも臨床検査技師が適任であると考えられる。③検体と医療情報の紐付け：電子カルテと連動したバイオバンキングシステム(LIMS)を構築したことにより、検体提供と同時に臨床情報を付加することが可能となった。④検体と臨床情報の一元管理：LIMSを用い、検査値や検体種別、疾患名、内服薬等による検体の検索を実現した。また、自動分注システムによる検体の分注とチューブ番号による検体の管理を一元的に運用することで、膨大な検体の効率的な管理を実現している。

【結語】臨床検査技師による検体の管理・提供は臨床研究の遂行を円滑なものにするだけでなく、検査医学の発展に寄与する可能性がある。例えば、検査試薬・機器メーカーとの共同研究においては、臨床検査技師が現場の声を発信し、新規開発・改良の一端を担うことが期待される。ヒト検体の収集・管理を司るバイオバンクでは、臨床検査技師は専門性を活かすことが期待でき、新たな活躍の場となる可能性を秘めていると考えられる。連絡先—078-302-7111